様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１３５

研究課題名（和文）近代英国小説史における作者の身体表象の研究：十八世紀小説を中心に

研究課題名（英文）Study in the Representation of the Author's Body in Modern British Novels, Especially in the Eighteenth Century

研究代表者
武田　将明（Takeda, Masaaki）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：１０４３４１７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：十八世紀イギリスの小説では作者が自らの姿を隠すことでリアリティを演出していた。しかし十九世紀には作者が作品の主権者として振舞うことが社会的に許容されるようになる。ところが二十世紀に入ると、主権者としての政治的な作者だけではなく、身体をもった自然的な作者もまた小説の前面に現れるようになる。本研究は、作者の身体の表象に注目して近代小説、とりわけ18世紀のイギリス小説の特徴を再検討することにより、イギリス近代小説史と小説の起源をめぐる研究に新たな局面を切り開くことを目指した。

研究成果の概要（英文）：In eighteenth-century Britain, the author produced the reality of his/her novels by means of the anonymous representation of him/herself. Since the nineteenth century, however, the author has been admitted as the authority who presides over the world of his/her works. Another shift occurred in the twentieth century, when the author has become not only the political agent or authority but also the natural existence with his/her body. This study focused on the representation of the author's body in modern, especially eighteenth-century novels in Britain and proposed a new way to look into the history of the modern British novel as well as the theoretical argument on the origin of the modern novel.

研究分野：イギリス文学、文学理論

キーワード：小説史　作者の身体　イギリス文学　小説の起源

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究を構想した経緯

2007 年に John Mullan が *Anonymity* という研究書を発表し、作者が匿名で小説を発表することの意義について分析した。

18 世紀イギリス文学を専攻する私は、以前から Defoe の *Robinson Crusoe* (1719)、Richardson の *Pamela* (1740)といった小説が「作者」の存在を隠蔽し、ノンフィクションの体裁で出版されたことに注目していたが、Mullan の著作には、なぜ特に 18 世紀に小説の作者が匿名性を重視したのかという疑問への解答は見られなかった。しかし、上に挙げた二冊の作品は、Ian Watt の *The Rise of the Novel* (1957)以来、しばしば近代的な小説の起源と考えられている。作者の匿名性の問題は、近代小説の勃興と深いつながりがあるのではないか、という疑問から、本研究課題を構想することになった。

(2) 研究の学術的背景

文学作品における作者の役割については、Sean Burke の *The Death and the Return of the Author* (1992：2008 年に第 3 版)、Emily Hodgson Anderson の *Eighteenth-Century Authorship and the Play of Fiction: Novels and the Theatre, Haywood to Austen* (2009)のような、批評理論を踏まえた研究に加え、Harold Love, *Attributing Authorship* (2002)のような実証的な研究もあり、近年の英語圏では比較的注目されている研究分野に数えることができる。

また、日本でも加藤典洋『テクストから遠く離れて』（2004）を代表として、小説における作者の位置づけを再考しようという研究は増えている。これは、ロラン・バルトやミシェル・フーコーによる「作者の死」の宣告の影響を受けてきた、1980-90 年代の文学研究に対する批判的な意識が、世界的に高まってきたことに対応している。

本研究は、こうした近年の文学理論の潮流を踏まえつつも、これらの研究が主体としての作者にこだわるあまり無視してきた作者の身体の問題を浮上させ、文学史研究の新たな方向性を示すことを目指した。

さらに本研究は、小説の起源をめぐる研究にも関係している。1957 年に刊行された Ian Watt の *The Rise of the Novel* 以降、Homer Obed Brown, *Institutions of the English Novel* (1997) や Leah Price, *The Anthology and the Rise of the Novel* (2000)のように革新的な研究も現れており、そこでは「小説」というジャンルの成立するための言説的な環境への問いが強調されている。

さらに、Jesse Molesworth, *Chance and the Eighteenth-Century Novel* (2010)のように、Watt 以来のリアリズム偏重の 18 世紀小説研究を批判する傾向も近年強まっている。

本研究は、こうした近年の動向を総合することを試みた。すなわち 18 世紀のリアリズム小説と、リアリズムから逸脱する小説の両方をつなぐ環境的な要因のひとつとして、作者の身体表象の問題に注目した。

２．研究の目的

本研究は、主に 18 世紀イギリス小説における作者の身体表象に注目することで、イギリス文学史、小説の起源をめぐる理論的研究、さらには植民地主義と小説との関係という文化史的な研究という三方向での新たな領域の開拓を目指した。

十八世紀の出版物を読んでみると、作者に向けられた批判がしばしば身体的なものになる傾向がある。つまり、小説の「本物らしさ」を確保するには、傷つきやすい作者の身体を読者の目に晒さないようにする必要があった。ゆえに、匿名によって作品と作者自身を守ることが、十八世紀の小説では重視された。

しかし、十八世紀を通じて著作権をめぐる法律が整備され、また同じ時期に小説が文学ジャンルとして台頭するなかで、作者を保護することの意味合いが、批評による攻撃の回避から経済的な権利の確立へと変化を遂げていく。十九世紀に入ると、小説には作者がいることが当たり前となった。

これが二十世紀に入ると、小説の表面において作者の自然的身体が露呈し始める。Virginia Woolf, “Modern Fiction” (1919)が宣言したように、社会全体を描く方向から個人の内面を掘り下げる方向へと文学の関心がシフトしたことがその原因である。

このような問題意識を前提に、十八世紀から二十世紀までの小説史を統一して検討する視点を得ることが、本研究の第一の目的である。第二に、近代小説の起源について、新たな知見を得ることも目指した。加えて、植民地問題を中心とした 18 世紀以降の西洋史と本研究で得られた知見を対照することで、小説の変遷の政治的背景を考察することも本研究の目的であった。

３．研究の方法

理論的には、「研究の学術的背景」の項で言及した小説理論を踏まえつつ、独自の小説観を構築することを目指した。

実際に研究の対象とするのは主に 18 世紀イギリスの小説だが、19 世紀以降のイギリス小説、およびイギリスに限定されない近代小説一般に応用できるような理論を提示するようにした。

期間内に十分な研究成果をあげるために、年度毎にデフォー、スウィフト、リチャードソンなど、特に研究する対象を絞って考察した。

基本的に毎年海外（イギリスかアメリカ合衆国）で資料調査を行い、一次資料を重視した。同時に、国内では伝わらない最新の研究情報を海外の研究者との交流によって獲得し、同時代の英語圏における最新研究を踏まえた研究を行った。

４．研究成果

本研究から得られた新たな理論的な知見は、以下の５つにまとめられる。

(1) 重商主義的な世界経済と 18 世紀小説における匿名性との関係の解明：Defoe, Swift,

Richardson, Sterne

現在、文芸誌『群像』（講談社）に連載中の論考「小説の機能」は（下記の主要業績の項の〔雑誌論文〕①から③）、本研究で得られた知見を元に、18 世紀イギリス小説における作者の機能を考察している。

ここで明らかになったのは、この時代の小説がしばしば重商主義的な世界経済の発展のなかで、伝統的な価値観や認識の枠組みの崩壊する様子を執拗に描いている点である。典型的なのは『ロビンソン・クルーソー』における人肉食、および『ガリヴァー旅行記』における主人公の身体の極大化・極小化であるが、ここで注目すべきは、重商主義世界における破壊的な傾向が、まさに肉体的な恐怖として表象されている点である。

この恐怖への作家の反応の一つとして、まさに本研究の主題である、18 世紀小説における作者の身体の隠蔽を説明することができる。さらには、デフォーのフィクションにおいては、この隠蔽が露骨に語られることで、かえって作者デフォーの身体とロビンソン・クルーソーなど主人公の身体が重ね合わされていることも実証した。

また、スウィフトの場合には、主人公であるガリヴァーの呼称が作中で何度も変化することによって、価値観の相対性が読者に伝わるように書かれている。これはデフォーの方法と似て非なるものである。すなわち、デフォーが作者の身体を匿名性の中で暗示するのに対し、スウィフトにおいてはすべての身体が相対性の中に置かれている。それが明瞭に示されているのが、『ガリヴァー』旅行記に付された肖像画である。そこではガリヴァーとスウィフトの外見的な類似が示されているだけでなく、肖像画自体が鏡として示されているため、同じ像が読者を映したものとしても解釈できる。つまり、作者、作中人物、読者の３者が交換可能な「もの」として並置されているのだ。

このように、18 世紀小説において、作品と作者と作中人物の関係は、ある点において現代小説よりもはるかに複雑に構築されている。これは小説をめぐる現代の常識に囚われていては不可能であろう。

この考察をもとに、リチャードソン『パミラ』に関する論考も発表した。『パミラ』では、上述の２作品と同様の肉体的な恐怖が、館の主人の策謀によって貞操の危機に瀕するヒロインを通じ、脅迫的に表現される。しかし今回、読者はパミラの保護者（手紙・日記の宛先である親）と同時に侵犯者（手紙・日記を盗み見る主人）の立場に置かれる。こうしてリチャードソンは恐怖をアンビヴァレントな快楽へと転換することに成功し、『パミラ』は空前絶後のベストセラーとなった。そして、このように読者の欲望を操作する技術は、その後の近代小説に受け継がれることになる。

研究期間中には、これに加えてスターンの『トリストラム・シャンディ』で繰り返し示さる主人公の身体的な欠陥、および作者と主人公との意図的な混同にまで考察を加える予定であったが、この論考は完成していない。しかし、2015 年のうちに発表する予定である。

(2) *Robinson Crusoe* の匿名性の改作における消失と植民地主義の関係

(1)の研究成果に示されたとおり、*Robinson Crusoe* において匿名性は決定的な重要性をもっている。匿名性を帯びているのは作者だけではなく、実は主人公のクルーソーもまた、作中での呼称が安定していない。これは、クルーソーが抱える実存的な不安を表現するのに有効であった。

しかし、*Robinson Crusoe* 刊行後に現れたダイジェスト版、さらには 18 世紀にヨーロッパ中で出版された改作版など、いわゆる「ロビンソン物語」においては、この原作における顕著な特徴が希薄になる。なかでも、ドイツの教育学者カンペによる『新ロビンソン物語』では、主人公の呼称をめぐる混乱は皆無に近い。これと呼応して、カンペ版のクルーソーは、原作と比べてはるかに強固な自我を持っており、従者であるフライデーに対しても常に立派なキリスト教徒・植民者・主人として振舞う。

ここから窺えるのは、19 世紀に強調され、20 世紀に批判された『ロビンソン・クルーソー』の植民地主義文学という側面は、原作以上に改作において顕著だということであり、別の見方をすれば、近代小説と植民地主義との関係は、18 世紀に遡って考えた場合、現代の研究者が考えているほど明瞭なものではないとも言える。

こうした考察を、下記主要業績における〔学会発表〕の①、⑦、⑬で行った。

(3) *Gulliver's Travels* への徹底した注解

原田範行氏、服部典之氏と共に、スウィフト『ガリヴァー旅行記』への徹底した注釈を作成した。私は本文の約三分の一に加え、作中の肖像画や地図に関する詳細な解説を付した。下記業績表の〔図書〕③に見られるように、担当箇所は計 290 ページであり、本文 593 ページの約 49%に及んでいる。『ガリヴァー旅行記』は、本研究の扱う主要なテキストのひとつであり、本研究の成果がこの注釈の随所に示されている。(1)の研究成果で言及した肖像画の分析は、そのひとつである。

(4) 名誉革命と近代小説との思想的連関

下記業績表の〔図書〕①に、私は「名誉革命とフィクションの言説空間：デフォー作品における神意の事後性」という論考を寄稿した。ここでは、名誉革命が血筋による王統という家父長的な時間秩序に反抗し、ウィリアム 3 世の新国王としての権威が事後的に演出されたことを指摘し、まさにこの演出に積極

的に加わっていたデフォーが、フィクションにおいてしばしば「神意」（Providence）に言及することの意義を追求した。そこには、研究成果(1)で示されたような、伝統的な価値観の崩壊に対抗する、新しい秩序を構築する原理が示されており、この点で『ロビンソン・クルーソー』などデフォーの小説は、名誉革命後の言説空間に対応していることが明らかとなった。

(5) 現代小説への理論的展開

本研究で得られた知見を、積極的に 18 世紀イギリス文学以外に応用した。現代イギリス文学の紹介記事である、業績表の〔雑誌論文〕⑥、⑦、⑩において、さらには現代日本小説を論じた〔雑誌論文〕④、⑤、⑧、⑨においても、上記(1)から(4)の論点を踏まえた考察を行っている。たとえば、⑨では、小説における秩序構築の事後性（研究成果(4)）という観点から、主人公が自らの晩年を意識しつつ過去を振り返る大江健三郎『水死』の物語的な特徴を解き明かした。また、⑧では、デフォー以来の小説における身体表象の問題から説き起こし、現代作家である平野啓一郎がしばしば義肢など人工的な身体にこだわる必然性を論証した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１０件）

① 武田 将明、小説の機能（３）:『パミラ』あるいは報われた名前、群像、査読有、４月号、2015、186-219．DOI なし

② 武田 将明、小説の機能（２）:『ガリヴァー旅行記』と名前の消滅、群像、査読有、１１月号、2014、188-214．DOI なし

③ 武田 将明、小説の機能（１）:『ロビンソン・クルーソー』という名前、群像、査読有、９月号、2014、124-62．DOI なし

④ 武田 将明、子宮と墓穴：小山田浩子における変身、早稲田文学、査読無、秋（８月）号、2014、156-63．DOI なし

⑤ 武田 将明、分人主義と小説の未来：平野啓一郎論、新潮、査読無、９月号、2013、199-212．DOI なし

⑥ 武田 将明、海外文学 2012 年：イギリス文学 現況と翻訳・研究、文藝年鑑、査読無、巻数なし、2013、87-90．DOI なし

⑦ 武田 将明、海外文学 2011 年：イギリス文学 現況と翻訳・研究、文藝年鑑、査読無、巻数なし、2012、89-92．DOI なし

⑧ 武田 将明、断端のノスタルジア：平野啓一郎と現代文学の条件、群像、査読有、11 月号、2011、208-39．DOI なし

⑨ 武田 将明、自分自身からの亡命者（エグザイル）:『水死』と晩年性、早稲田文学、査読無、第 4 号、2011、282-99．DOI なし

⑩ 武田 将明、海辺の文学：イギリス・アイルランドの現代小説と「海」、波、査読無、９月号、2011、11-12．DOI なし

〔学会発表〕（計１３件）

① 武田将明、“Of What Use Art Thou to Me?”: Ōtsuka Hisao's Reading of *Robinson Crusoe* vis-à-vis Joachim Heinrich Campe's *New Robinson Crusoe* 、International Conference: Robinson Crusoe in Asia、2014 年 9 月 19 日、筑波大学（茨城県・つくば市）

② 武田将明、斉藤渉、久保昭博、大崎さやの、隠岐さや香、啓蒙とフィクション、日本１８世紀学会第 36 回全国大会、2014 年 6 月 22 日、福山市立大学（広島県・福山市）

③ 武田将明、秦邦生、稲垣伸一、佐久間由梨、ユートピア／ディストピア再考：歴史、ジェンダー、共同体、日本英文学会関東支部第９回大会、2014 年 6 月 21 日、成城大学（東京都・世田谷区）．

④ 武田 将明、鴻巣友季子、藤井光、翻訳とジェンダー：越境する文学の時代に、東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻（卓越資金）、2014 年 2 月 22 日、東京大学駒場キャンパス（東京都・目黒区）．

⑤ 武田 将明、スウィフトの手、ガリヴァーの手、ガリヴァー旅行記の愉楽（リブロ池袋店トークイベント）、2013 年 12 月 1 日、西武池袋本店別館８階コミュニティーカレッジ（東京都・豊島区）．

⑥ 武田 将明、平野啓一郎の文学と現代社会の共生、2013 年 UTCP-Yonsei 国際シンポジウム、2013 年 6 月 14 日、ソウル（韓国）．

⑦ 武田 将明、大川勇、斉藤渉、18 世紀における《ロビンソン物語》、日本ヘルダー学会、2012 年 12 月 16 日、梅田ちゃやまちアプローズタワー（大阪府・大阪市）．

⑧ 武田 将明、”Dividualism” and Atonement or How to Act after the Quake: Reading Novels by Keiichiro Hirano, Ian McEwan, Fuminori Nakamura, and Risa Watay,.UTCP, 2012 年 10 月 26 日、東京大学駒場キャンパス（東京都・目黒区）．

⑨ 武田 将明、デフォー『ペストの記憶』とロンドン、飯田橋文学会、2012 年 10 月 21 日、飯田橋文学会コモンスペース（東京都・千代田区）．

⑩ 武田 将明、池田寛子、Ciaran Murray、To Islands, I: Odysseus, Gulliver, Oisin、IASIL Japan、2012 年 10 月 7 日、明治大学駿河台キャンパス（東京都・千代田区）

⑪ 武田 将明、田口卓臣、辛島デイヴィッド、佐藤嘉幸、災害と文学、2012 年 7 月 29 日、東京大学駒場キャンパス（東京都・目黒区）．

⑫ 武田 将明、大河内昌、原田範行、18 世紀イギリス文学を翻訳する、2012 年 6 月 16 日、専修大学神田校舎（東京都・千代田区）．

⑬ 武田 将明、長谷川貴彦、川端康雄、（タイトル）見市雅俊編『イギリスを読む：文学の語りと歴史の語り』合評会、「歴史と人間」研究会、一橋大学（東京都・国立市）．

〔図書〕（計４件）

① 武田 将明 他、春風社、名誉革命とイギリス文学、2014、313-73.
② 武田 将明 他、三修社、イギリス文学入門、2014、90-96，99-119，356-71.
③ 武田 将明 他、岩波書店、『ガリヴァー旅行記』徹底注釈、2013、注釈篇の 3-78，157-201，255-325，372-81，401-56，534-65.
④ 武田 将明（訳・解説）、河出書房新社、ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』、2011、505（解説 463-99）.

〔産業財産権〕：特になし

〔その他〕
ホームページ等：特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
武田 将明（TAKEDA，Masaaki）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：１０４３４１７７

(2)研究分担者：なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者：なし
（　　）

研究者番号：